

ニホンザルの生態と被害防除

—サルに強い地域づくりを目指して—

はじめに

ニホンザル（図-1）による農林業被害が全国各地で深刻化し、地域によっては山村の生活そのものを脅かす重大な社会問題となっています。集団による食害は痛ましいまでの惨状を呈し、時にはこれを防ごうとする人を威嚇することさえあり、人々の敵対感情を煽っています。かつて山の民にとってサルは親しい存在であったろうことは民話などを通じてもうかがい知ることができます。しかし、いつの頃から人々はサルを恐怖と憎しみの対象とするようになったのでしょうか。

ここでは、被害拡大の背景と被害対策の現状について紹介し、今後の防除対策のあり方を考えてみたいと思います。

ニホンザルってどんな動物？

分布と形態： ニホンザル（以下、サル）はサル目オナガザル科に属し、本州、四国、九州、金華山島、淡路島、小豆島および屋久島などに分布する日本固有種です。分布の北限は青森県下北半島、南限は屋久島で、ヒトを除く現生のサル（霊長）目の中で、最も北にまで分布しています。オスの方が大きく、頭胴長 53～60 cm、体重 10～18 kg で、メスでは頭胴長 47～55 cm、体重 8～16 kg です。

生活史： 主として低地の広葉樹林から亜高山帯の針広混交林にすみ、数頭のオス成獣およびメス成獣とその子どもからなる群れを形成し、遊動生活をします。通常、群れのサイズは十数頭から百数十頭で、遊動域は 1 km²未満から 25 km²です。昼間に活動し、雑食性で、果実、種子、葉、樹皮のほか、昆虫、サワガニ等の小動物も採食します。交尾期は秋から冬、出産期は春から初秋ですが、地域によって差があります。メスは 5～6 歳で初産し、出産は通常、隔年で、1 回に 1 頭の子を産みます。オスは 6～7 歳で性成熟します。メスは自分の生まれ育った群れに生涯とどまりますが、オスは成長するに従って出自群を離れ、10～11 歳までにほぼ完全に姿を消します。群れを離



図-1. ニホンザル



図-2. カボチャの食害

れたオスは、他の群れに加入したり、オスグループを形成したりするほか、「ハナレザル」として単独生活を送ります。大部分の個体は 25 歳までに死亡しますが、30 年以上生きた個体も確認されています。

被害の現状

イモ類、豆類、葉菜類、根菜類や果実等ほとんどの農作物が対象となるほか、スギやヒノキなど針葉樹の剥皮や広葉樹幼齢木の引き抜きの被害も報告されています。被害の形態はまさに食い荒らしで、野菜や果実でも一部のみを摂食して、散乱させることが多く（図-2）、多くの場合、被害量は採食量をはるかに上回ります。

このような猿害は 1970 年代後半から、各地で問題化し始め、1980 年代以降は増加傾向が顕著になりました（図-3）。被害増加の原因についてはまず、スギ・ヒノキの拡大造林にともなう生息環境の悪化が挙げられます。また、1947 年の禁猟措置と山村の過疎化および高齢化が、農地からの追い払いの質と量を低下させ、サルのヒト慣れが急速に進行したことも大きな要因でしょう。さらに、栄養価の高い農作物をメニューに加えるうち、サルの生活史特性そのものにも変化をもたらされました。すなわち、初産齢の低下や連年出産、幼獣の死亡率の低下によって個体数を増加させたことが猿害の増加の一因となっているケースが、農作物に恒常的に加害する群れや餌付け群を中心に見られます。農作物に依存する群れでは、点在する農地を巡るために数十 km² に及ぶ遊動域を持ち、広範囲に被害をもたらすこともあります。

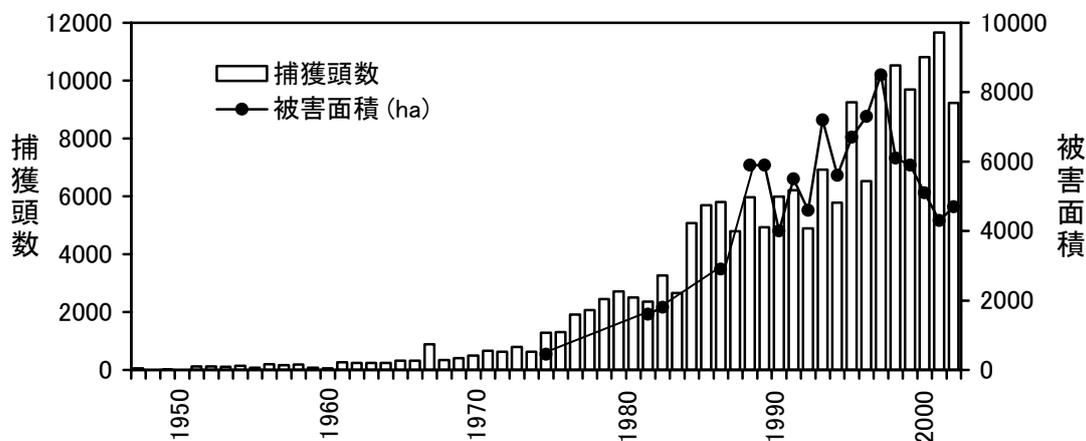


図-3. 全国のニホンザルの捕獲頭数と農林産物被害の推移
捕獲頭数は環境省，被害面積は農林水産省の調べ。

これまでの被害対策とその問題点

これまで、最も広く行われてきた防除対策は駆除、すなわち捕獲です。捕獲頭数は被害の深刻化した 1980 年代後半から急増し、1998 年以降は全国で年間約 10,000 頭の水準で推移しています（図-3）。しかし、被害が沈静化している様子はなく、その被害抑止効果については疑問視されています。すなわち、加害群をすべて取り尽くしても、隣接群がすぐそこに進出してきて被害を出した例が報告されており、群れ内で有

力なオスを除去した場合に群れが分裂して被害区域が以前よりも広がった例もあります。加害群を正しく識別した上で、計画的な群れ管理を行い、駆除実績と被害量を常にモニタリングしながら、計画を修正していく努力が必要です。

防護柵や電気柵による侵入防止も広く行われています。しかし、漁網や金網で農地の周囲を囲むだけでは侵入は防ぎきれず、被害を完全になくすにはステンレス線の入った漁網や金属製ネット等で周囲だけでなく、天井面も覆う必要があります(図-4)。電気柵の場合は、天井面を覆う必要はありませんが、高さは2 m以上とし、草が接触してショートしないよう下刈りをしたり、防草シートを敷いたりする必要があります。いずれの場合も設置に多大な労力と費用を要し、保守管理も不可欠です。



図-4. 天井面も金網で覆った農地

追い払いも継続的に実施されれば大きな効果が得られます。しかし、農地周辺を常に監視して、サルの出没時に繰り返し追い上げを行うには、集落単位で自警団を結成するなど、多大な労力投資が求められます。

一方、全くあるいはほとんど効果がないにも関わらず、広く使用されているもの(例えば爆音器、威嚇音器、反射テープ、カカシの設置等)があり、電気柵についても設置や管理の方法が不適当なものが多く見られます。このことはニホンザルの習性や被害対策のあり方についての普及が不十分であることを示しています。

これからの被害対策 —サルに強い地域づくり—

猿害対策は地域全体で取り組むことが重要です。そのための方策をご紹介します。

敵を知る： 被害を防ぐためには、まず、「敵」を知ることが大切です。サルの生態や被害防除に関する基礎知識を身につけましょう。地域で勉強会等を開催する場合は林業研究部もお手伝いします(図-5)。



図-5. 地域住民を対象にしたサル対策研修会

サルの生態や被害対策について学習し、侵入防止柵の設置方法等について体験する。

農地を適正に管理する： 被害のひどい地域へ行くと、畑には柵もなく、収穫されない野菜が放置されているのをよく見かけます。このような放置野菜はサルの群れを誘引する大きな要因となることが多く、恒常的に被害をもたらす群れを作り出します。特に冬季に、イモ類やカボチャなどカロリーの高い野菜類が捨てられ、これらが利用されると栄養条件が良くなって死亡率が低下し、個体数の増加につながる可能性があります。また、収穫することのない果樹や桑などは思い切って伐採しましょう。



図－6. 収穫されないまま放置された野菜

山に近い畑などでは、トウガラシやこんにゃく、オクラなど「サルの好まない野菜」を優先的に栽培することも有効です。

追い払う： サルが集落に近づいた時には、たとえ農作物を荒らしていなくても、必ず追い払いましょう（図－7）。通常、猿害は段階的に進行し、被害量は人間に対する警戒心に反比例して、増加します。放置すれば、被害は際限なくエスカレートし、時に人身被害を引き起こすことさえあります。群れが時折姿を見せるようになった初期段階で、徹底した追い払いを行い、人間とサルとの間に常に緊張関係を保っていかなければなりません。効率的な追い払いをするには電波発信機の利用が有効です。受信機を使ってサルの接近をいち早く探知し、有線放送や電話連絡網などを使って地域住民がその情報を共有することが可能になります。追い払いを継続すれば、サルは農地に近づく際に警戒するようになり、比較的簡単な柵などでも被害防止効果があがります。

サルの嫌がる集落に： 猿害対策で最も大切なことは、農地を含めた集落全体をサルにとって「魅力のない場所」にすること、すなわち「行けば必ず追い払われ、危ない目に遭う」、「畑には（柵などの）邪魔なものがあり、簡単に餌をとらせてくれない」ということをサルに学習させることです。これらはとても根気のいることですが、地域が一体となって取り組みましょう。



図－7. ロケット花火を使った追い払い



図－8. 電波発信機を装着されたサル

2006年3月30日発行

© 三重県科学技術振興センター 林業研究部

515-2602 三重県津市白山町二本木 3769-1

TEL: 059-262-5352; E-mail: ringi@pref.mie.jp